

Title	ティハーマ・アルアシールの文化遺産と研究動向
Sub Title	Current researches on the cultural heritage of Tihāmat al-'Asīr
Author	徳永, 里砂(Tokunaga, Risa)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.84, No.1/2/3/4 (2015. 4) ,p.537(537)- 549(549)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第1分冊) 論文 民族学考古学
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0537">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0537</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ティハーマ・アルアシールの文化遺産と研究動向

徳 永 里 砂

## 一 はじめに

アラビア半島の北西部から南西部にかけて、紅海に平行してサラワート山脈が連なる。ティハーマとは、この山脈と紅海の間を指す言葉で、北はヒジャーズ地方、南はイエメンまで非常に広域に亘り、ライス以北はティハーマ・アルヒジャーズ *Tihamat al-Hijaz*、ライスからジャーザーンまではティハーマ・アルアシール *Tihamat al-'Asir*、それ以南はティハーマ・アルヤマン *Tihamat al-Yaman* と区分される<sup>(1)</sup>。しかし、現在には一般的には後者の二地域のみがティハーマと呼ばれ、古くからの伝統文化に基づいた暮らしが今なお残る非常に希少な地域を含んでいることで知られる。ティハーマは非常に乾燥した熱帯気候であるものの、内陸のサラワート山脈の雨水

と沃土を運ぶワデーの存在により良好な農耕地に恵まれ、山脈付近には段々畑が連なる。この地域には海上貿易、巡礼路に関する多くの遺跡が確認され、初期イスラーム時代以降は文献史料における言及も多い。本稿では、筆者が今後のフィールドワークの実施を検討しているサウジアラビアのティハーマ・アルアシールに的を絞り、その文化遺産の状況について考古学、伝統建築、民族学、言語学に分けて研究動向を紹介する。

## 二 文献史料に見られるティハーマ・アルアシール

ギリシャ・ローマ古典史料にはティハーマ・アルアシールの港に関する記述はないが、アガサルキデスの『エリトウラー海について』(前一六九年)<sup>(4)</sup> およびストラ

ボン(前六四〜後二四年)の『地理誌』<sup>(5)</sup>では、現在のク  
ンフザとワデーイー・バイシユ Wadi Baysh の間あたり  
に、デバイ Deba' という牧畜民と農耕民から成る部族  
が住み、そのさらに南の水が豊かで気候の穏やかな地域  
には温和な人々が住み、金を産出することが記されてい  
る。

ティハーマという語が初めて現れるのは後期サバ語に  
属する古代南アラビア語碑文である。二七五年頃に南ア  
ラビアを統一したヒムヤル王国は、四世紀初頭までに  
ティハーマとその内陸の山地の部族も支配下に治め、五  
世紀初頭からはヒムヤル王の称号は「サバとズー・ライ  
ダーンとハドラマウトとヤムナおよびタウドとティハー  
マのアラブたちの王」*mlk Sv' w-dRydn w-Hymwt  
w-Ymnt w-'rb-hmw Twdn w-Thmt*となる。<sup>(8)</sup> ロバンは、  
当時のヒムヤル王国がナジド地方まで支配していたこと  
から、「タウド」をナジド、「ティハーマ」をヒジャーズ  
沿岸部と解釈している。<sup>(9)</sup> このようなティハーマの捉え方  
はイスラーム時代以降も引き継がれ、イスラーム時代初  
期の文献でのティハーマの北限もマッカの北のザート・  
イルク Dhāt 'Irq 及びジッダの北のアスファーン 'Asfan  
であった。<sup>(10)</sup>

イスラーム時代以降、ティハーマの港の名は交易港、  
巡礼路の宿駅地として頻繁に文献に現れるようになる。<sup>(11)</sup>  
ティハーマ・アルアシールは九世紀にイエメンのザビー  
ドを拠点に栄えたジャード朝の支配下に入り、さらに  
トゥールーン朝、ファーティマ朝期のエジプトの繁栄に  
より紅海港の重要性が高まると、アッサル 'Attar をは  
じめとするこの地域の港は海上貿易の重要な拠点となっ  
た。十世紀のイブン・ハウカルの地図には、ジッダとイ  
エメンのムーハ(モカ)の間にシッライン al-Sirayn、  
ハリー Hal'、ハムダ al-Hamda、アッサル、シャルジャ  
al-Sharja、ハルダ al-Harda、ガラーフィカ Chalāfqa と  
いう港の名前が見られる。<sup>(12)</sup> アッサルの港は一〇六一年頃  
までに廃棄され、他の港も交易港としては衰えた。十三  
世紀のイブン・ムジャーウイルの記録には、シッライン  
と再建されたハリーが言及されている。<sup>(13)</sup> ハリーには十四  
世紀にはイブン・バットウータも滞在しているが、<sup>(14)</sup> その  
後も陸海の巡礼路の中継地点として十九世紀前半まで記  
録が見られる。<sup>(16)</sup> 十六世紀後半のマッキーによるオスマン  
帝国の総督スイナーン・パシヤのイエメン遠征の記録で  
は、マッカから陸路ティハーマ経由でイエメンに向かう  
際のマッカ・タイイズ間の通過地点として記されている

のは、ジャーザーンのみである<sup>17)</sup>。

ヨーロッパ人による旅行記を見ると、十六世紀初頭のバルボサの旅行記はジャーザーン、ハリー、アルフル al-Khur<sup>18)</sup>、十八世紀のニーブルの旅行記はアブ・アリーシュとジャーザーンについて記しているが<sup>19)</sup>、それ以降の文献に見られるジッターとイエメンの間の港はジャーザーンのみとなる。

一方、ティハーマ・アルアシールの内陸部に関する記述は、山地の詳細な地名、植生などを記した八世紀のアッラーム・アッスラミーの地理書『ティハーマの山名の書』<sup>20)</sup>とニーブルのイエメン地図などがあるが、前世紀まではティハーマの山地の人々の暮らしについてはごく限られたことしか知られていなかった。二〇世紀になり、初めてヨーロッパの探検家たちが内陸部を訪れ、ティハーマの山地の部族の暮らしが記録されるようになった。その代表的なものは一九三六年にこの地域を訪れたファイルビート<sup>21)</sup>と、一九四六年と一九四七年に訪れたセシジャーによる記録である<sup>22)</sup>。これらは、石油による経済的繁栄以前の伝統的慣習が残っていた時代を記録した民族誌としても非常に貴重な資料である。

### 三 考古学的研究

一九六三年にサウジアラビア教育省に新たに設置された考古局は、国土を東、北、北東、西、南西、中央の六地域に分割し、一九七六―一九八一年の五カ国年遺跡調査計画のもと各地域に内外の専門家から成る調査隊を包括的調査のために派遣した<sup>23)</sup>。ティハーマ・アルアシールはそのうちの南西部に属し、調査の結果、中期旧石器時代以降二〇世紀初頭までの遺跡・歴史的建造物が登録された。

先史時代に関しては、一九八〇年のザリーンスらの調査で、紅海沿岸にムステイエ文化に属する数々の旧石器時代の遺跡が確認された<sup>24)</sup>。二〇〇四―二〇〇九年の英・サウジアラビア合同調査隊によるファラサン島の調査では、千基以上の貝塚が確認され、発掘調査と海底調査も実施された。表面採集された石器は、前期、中期旧石器時代のものと考えられている<sup>25)</sup>。

また、ティハーマの港の遺跡調査では、文献史料で言及されていた海上交易の様相が実際に明らかにされた。一九八四年、サウジアラビア考古局とザリーンス、ザハラニーらにより、アッサル港の発掘調査とシヒー Shihī

の表面調査が行われた。アツサルでは中国陶磁をはじめとするさまざまな交易品が出土し、アラブ商人によるインド洋交易の実態が明らかになった。<sup>(29)</sup>一方、シヒーで発見された土器からは、それが前一五〇〇年頃から南アラビアとスビアとの深いかかわりあることが判明した。<sup>(30)</sup>一九九一年にはスナイヤーンらがシツライン、ウルヤブ、Jilka、ハリー、アツサル、シャルジャで表面調査を行い、採集した土器、陶磁器から、輸人品と地産品を扱う交易港としてのこれらの港の機能を明らかにした。<sup>(31)</sup>

碑文に関してみると、古代の香料貿易の隊商路の通るサウジアラビア南西部の内陸は、概して岩壁碑文の非常に豊富な地域であるが、ティハーマ・アルアシールは、内陸のナジュラン地方やアシール西部に比べると碑文の数は極端に少ない。灼熱の暑さから逃れようのない平野は主要隊商路としては適さず、またそこはワデーイが運ぶシルトの土壌で、碑文を刻むのに適した岩が少ないことがその理由として挙げられる。また緑に覆われた山岳部にも、刻文に適した岩が乏しい。

一九九二年には、ジャーザーン近郊、ファラサン島、クンフザ近郊でカバウイーらによる踏査が行われ、古代南アラビア文字、サムード文字、イスラーム時代初期の

アラビア語碑文、岩絵などが僅かながら記録された。<sup>(33)</sup>戦略的な位置にあるファラサン島ではその後、フィリップスらの調査でローマのトラヤヌス第二軍団による一四四年のラテン語碑文が記録され、エチオピアの影響力が強まる以前のファラサン島の港がローマ軍の支配下にあったことが明らかになった。<sup>(34)</sup>また、前一千紀半ばのものを含む古代南アラビア文字碑文も新たに報告された。<sup>(35)</sup>

一方、イスラーム初期の交易港の遺跡からは、丁寧に刻まれた装飾クーファ書体の墓石が発見されている。特に、シツラインの港では四八基の墓石が発見され、ファキーフにより刊行されている。<sup>(36)</sup>刻まれた年号は九世紀前半から十一世紀半ばに位置付けられ、アラビア文字書体研究の観点からも貴重な史料である。<sup>(37)</sup>

#### 四 伝統建築の研究

ティハーマの伝統建築の研究は、一九七三年以降長年に亘ってサウジアラビア各地にて現地調査を行っているキングと、<sup>(38)</sup>一九七三年～一九七五年にサウジアラビア南部の方言の研究のための調査を行ったプロチャツカによって行われた。<sup>(39)</sup>一九七〇年代のティハーマ・アルアシールには、まだ多くの伝統建築が残されていた。

ティハーマ・アルアシールの伝統建築は大別すると石造建築、全体がソルガムなどの藁で作られた小屋、テントの三つに分けられる。

ティハーマの山地には、バーハやアシール地方に広く見られる、荒く成形された石を、目地材を使用せずに積んだ石造建築が残されており、近代になってから廃棄された集落が手つかずの状態で放置されていることも多い。中には四、五階建ての建築物も見られる。

ジャーザンやアブー・アリーシュ周辺の南部の海岸平野では、ウツシャ *ushsha*（複数形…ウシヤシユ *ushshu*）と呼ばれる、地産の植物で作られた先の尖った屋根を持つ円形の小屋が特徴的であるが、一九八二年頃までにこのような家々は近代的なコンクリートの家屋に置き換えられていった。十九世紀にはこのようなウツシャはヒジャーズ地方にも存在していたといわれるが、二〇世紀後半以降はティハーマ・アルアシール以外では見られなくなった。ウツシャはティハーマ・アルアシールに現在も僅かに残されているものの、もはや住居としてではなく、伝統的な雰囲気を楽しむ憩いの場として使われるのみである<sup>(43)</sup>。

またこの地域の遊牧民は、アラビアの他の地域に広く

見られる黒いヤギの毛の織物でできたバイト・アツシャ *al bayt al-sha'a* とは異なる、藁で作られたハドウル *hadur* というテントに住んでいた<sup>(44)</sup>。ハドウルは、少なくとも一九七〇年代初めにはティハーマの人里離れた地域でのみ存在していたことがキングにより確認されている<sup>(45)</sup>。

上記以外に、一九〇六年にオスマン帝国から分立したイドリーシー朝の都であったサブヤーと、ジャーザン近郊のファラサン島には細かい彫刻の施された白漆喰に覆われた特徴的な建造物が存在する。サブヤーのイドリーシー朝の建築はサウジアラビア考古局とザーリンスらの一九八〇年の包括的調査で登録され、キングもサブヤーとファラサンの漆喰建築の調査を行っている。

## 五 民族学的研究

ティハーマには、現在も伝統文化・慣習が色濃く残るとはいえ、それらの多くがこの半世紀間の間に、オイルマネーの投入による近代化と教育制度の発達や政府の指導によって大きく変化を遂げた。ティハーマを含むサウジアラビア西部の地方固有の伝統・慣習を失われる前に記録しておくため、一九七九年から一九八二年にかけ

て、オーストリア社会人類学研究所とキング・サウード大学考古学・博物館学科が共同で「サウジアラビア王国南西部の民族誌地図」(Ethnographic Atlas of the South-Western Provinces of the Kingdom of Saudi Arabia) プロジェクトを展開した。この中で、オーストリアのドスタルとギングリツヒは、伝統的製鉄法、掘り棒などの農具、動植物を一年のうちの一定期間狩猟・採取しないことを定めたヒマー *hima* と呼ばれる保護区が存在、成人するための通過儀礼としてかつて行われていた下腹部から大腿内側にかけての剥皮を含む割札などについて、個別研究に加え、質問票を用いた広域な分布調査を行った<sup>(47)</sup>。これをもとに作成されたそれぞれの慣習の分布地図は、今後この地域で行われる民族学研究の基礎資料として大いに役立つものである。

## 六 言語学的研究

ティハーマを含むサウジアラビアの諸方言の調査・研究は、プロチャツカによって行われ、その集大成として刊行された文法書で、南ヒジャーズ、ティハーマ諸方言の概要が初めて文法書の形にまとめられた<sup>(48)</sup>。

ティハーマ・アルアシルは言語学の大きな論点に關

わる希少なフィールドである。古代の南西アラビアの言語は南アラビア語で、北アラビア語に属するアラビア語とは系統を異にする言語であった。アラビア語は北アラビア出身の部族の移住とイスラームの拡大によってアラビア半島南部にも浸透していったが、今なお半島南部の一部の地域では、マフラ語<sup>(49)</sup>に代表されるように、古代南アラビア語の流れを汲む現代南アラビア語が話されている。ティハーマ・アルアシルの山地の一部にも、南アラビアの古い言語の特徴や語彙の混ざった独特のアラビア語方言が残る。その代表的なものはファイファー山 *Jabal Fafar* の住民の方言で、他の地域の者には理解不能である。

また、その他のティハーマ・アルアシルのアラビア語の方言にも他の地域には見られない特徴が見られる。アラビア語が「ダード (d) の言語」と呼ばれるように、ダードの文字と発音はこの言語を特徴付ける要素とされる。しかし、イスラーム時代初期の文法学者の描写からは、当時はこの文字が現在の正則アラビア語の発音とは異なる側面摩擦音 *ḍ* を表していたということが分かっている。この側面摩擦音はイエメン南部のダシーナ *Dathina* 方言を除き、口語アラビア語にはもはや残って

いないものとされてきた。ところが、近年、アシール地方のアブハー出身の言語学者アズラキーの近年の調査で、ティハーマのいくつかの地域の方言でこの側面摩擦音が存在することが明らかになった。<sup>51)</sup> ティハーマ・アルアシールを含むアシール地方には、これ以外にも他の口語アラビア語にはない音声学的特徴が見られ、更なる研究が進められている。

## 七 おわりに

以上、ティハーマ・アルアシールに関する文化遺産とそれらに関する文献、考古学、伝統建築、民族学、言語学研究について紹介してきた。この地域を対象とする研究は半世紀に満たないにもかかわらず、それぞれの分野で既にかんがりの成果が蓄積されてきたと言えよう。

ティハーマ・アルアシールの諸港については、遺跡の存在が確認される以前より、史料の豊富な紅海交易史のコンテキストの中で、文献による研究が進められてきた。大規模な発掘調査には至っていないものの、アツサルやシツラインをはじめとする港の出土遺物は、既に広域な国際商業ネットワークの様相を垣間見せており、今後の発掘調査の成果が大いに期待される。

サウジアラビアの主要な伝統的建築物は、キングラによる長年の調査により記録が行われてきたが、ティハーマ・アルアシールを含む南西部にはまだ史跡として登録されていないものも数多く存在する。一九八〇年代まで居住されていた伝統的家屋の村落が、現在もそのままの形で放置されている例も多い。地中に埋もれている遺跡は、遺跡区として保護されている限りにおいてはさほどの緊急性がない一方、現存する伝統的建築物に関しては、風雨による劣化の恐れがあり、保護と建築工法の記録が不可欠である。二〇〇八年のイスラームに関する史跡の保護推進に関する国王勅令を踏まえ、観光・考古庁は現在、宗教省とトラス財団と共同で「歴史的モスク保全国家プログラム」(National Program for the Care of Old Mosques)を進めている。<sup>52)</sup> 伝統的建築物の保存には莫大な予算が必要とされるため、宗教史跡以外に関しても、重要な建築物や街並みについて、このような国家規模のプロジェクトの発足が望まれる。<sup>53)</sup>

これと同様に急を要するのは、民族誌学研究である。世代交代、近代化、他地域との交流によって忘れられてゆく前に、高年齢層からの伝統的慣習、民間伝承に関する聞き取り調査を行い、より多くの記録を行う必要がある。

る。また、言語学的調査に関しても同様で、テレビ、インターネットの普及、他地域出身者との交流によって、方言や地域独自の言葉が変容してゆくことは明らかで、現状を記録することに大きな意義がある。

一方、若い世代の中で、自分たちのアイデンティティーに誇りを持ち、独自の言語・伝統文化を積極的に守ろうという気運があることも事実である。<sup>(5)</sup>このような中で今後、より多くの地元出身の研究者が育ち、他地域の研究者と連携しながら地域研究が進められてゆくことが期待される。

テイハーマ・アルアシルはそれぞれの地域が有形・無形の文化財の宝庫であり、個別研究を必要とする特有の文化遺産を数限りなく有している。文化財保護に関する教育の普及、文化財を活かした街づくりを通して、地元の人々の参画の下、史跡・文化財の調査・研究・保護、民族誌の記録が行われることが望まれる。

註

- (1) G. R. Smith, "Thama" in *Encyclopaedia of Islam 2<sup>nd</sup> edition*.  
 (2) ティハーマ・アルヒジャーズという言葉が存在するもの、筆者によるヒジャーズ地方、アシル地方住民か

らの聞き取り調査(二〇一四年十二月実施)によると、現在はジュエッタやマッカを含むのライス以北の地域がティハーマと呼ばれることはないという。

- (3) ティハーマ・アルアシルはマッカ、バーハ、アシル、ジャーザーンの四州にまたがる。

- (4) 五卷九七〜九八節 (S. Burstein, *Agatharchides of Cnidus. On the Erythraean Sea*, London, 1989, pp. 156-159)

- (5) 十六卷四章六節十八 (ストラボン『ギリシマ・ローマ世界地誌』II、飯尾都人訳、p. 528)。

- (6) *Agatharchides, op. cit.*, p. 156, note 5.  
 (7) イエメンのマアリブから出土した三〇〇年頃の古代南アラビア語碑文 Ja 658+659 に *hmr*、ヒムヤルの軍人王

シャンマル・ユハルイシユ Shammar Yuharish がティハーマの山地のワーティーに遠征を行っている (A. Janme, *Sabaean Inscriptions from Ma'hiram Bilqis (Marib)*, Baltimore, 1962, pp. 163-164)。

- (8) この称号を含む碑文は二二点知られているが、その中で最古のものは四四〇〜四四五年頃の Ry 509、最も新しいものは五五八年の Ja 547+548+544+545 である (C. Robin, "L'inventaire des documents épigraphiques provenant du royaume de Himyar aux IV-VIe siècles," in C. Robin and J. Schiettecatte eds, *L'Arabie à la veille de l'Islam*, Paris, 2009, pp. 165-216 at pp. 191 and 187)。  
 (9) タウト *Tud* がアラビア語の「山」と同様「高地」を意味するのに対し、ティハーマ *thmt* は海岸平野を意味する言葉であるが (J. C. Biella, *Dictionary of Old*

- South Arabic: Sabaean Dialect*, Harvard, 1982, pp. 216 and 532). ロバンは、三度の五〜六世紀のヒムヤル王による碑文がマールサル Masal のジユムフ山 Jibal Al-Jumh (リヤドの西約二二五キロメートル。Ry 506) とムライイガーン (カフラの西約二二五キロメートル。Ry 509、Ry 510) で発見された石碑を根拠に、このように解釈をしよう (C. Robin, "L'antiquité" in *Route d'Arabie*, Paris, 2010, pp. 81-99 at pp. 86-87 以下) I. Gajda, "Himyar en Arabie central—un nouveau document," *Arabia* 2, 2004, pp. 87-98 and figs. 50 and 68, pp. 222 and 233)。
- (10) Yaqūt al-Hamawī, *Mu'jam al-buldān*, Bayrūt, 1993, p. 63.
- (11) アクスム時代もジヤーザーン付近のフアラサーン島やマッサルが交易活動に利用されていたことがわかるが、資料は少ない (J. Zarins and A. Zahran, "Recent Archaeological Investigations in the Southern Tihamā Plain (The Sites of Athar, and Sih, 1404/1984)," *Atlat* 9, 1985, pp. 65-107 and Pls. 69-96 at p. 89)。
- (12) "Sūrat baḥr fāris" in Ibn Hawqal, *Sūrat al-ard*, Bayrūt, 1993, pp. 49 and 50.
- (13) スナイヤーンはイエメンの歴史家シヤナディーア al-Janadi (七三〇〜七三三/一三三二九〜一三三三一年没) の「長らく以前に廃墟となった」という記述に基づき、十三世紀後半をその終焉とし、この年代はシフラーフ・アルスライマーンの都が上ジヤーザーンに移る時期と合致するであろう (M. Al-Thenayian, "The Red Sea Tiha-

- mi Coastal Ports in Saudi Arabia," *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 38, 2008, pp. 289-300 at p. 294)。既に一〇六一年の時点で、ノムダーニーがマッサルの廃棄について記している。
- (14) R. Smith (tr. and ed.), *A Traveller in Thirteenth-Century Arabia*, *Ibn Al-Mujawir's Tarīkh Al-Mustabīr*, London, 2008, p. 80.
- (15) イブン・ヌットウター『大旅行記』を、イブン・シハブ・イブン編、家島彦一訳注、平凡社、一九九八(二〇〇一)、一一〇〜一一三頁。以下はイブン・ヌットウターがシヤナディーアに引用している。
- (16) Al-Thenayian "The Red Sea Tihami Coastal Ports," p. 293.
- (17) C. Smith, *Lightning over Yemen: A History of the Ottoman Campaign (1560-71), being a translation from the Arabic of Part III of al-Bary al-Yamanī fi al-Fah al-Tihamānī*, London and New York, 2002, pp. 19-22.
- (18) Duarte Barbosa, *A Description of the Coasts of East Africa and Malabar*, edited and translated by H. Stanley, London, 1866, pp. 25-26.
- (19) M. Niebuhr (sic), *Travels through Arabia and Other Countries in the East II*, R. Heron (tr.), Edinburgh, 1792, pp. 53-57. ニーブールはジッタからイエメンのルハイヤ港までの間を一七六二年に縫合船で旅している。
- (20) Arrān bin Al-ʿAsbāgh al-Sulamī, *Kutāb ʿasma jibal tihānah*, Muḥammad Saḥī al-Shunāwī (ed.), Bayrūt,

- 1990.
- (21) C. Niebuhr, *Terrae Yemen Imperii Imami Principatus Kankeban*, Paris, 1787. ニーブールの地図には北からブー・アリーシユの背後の山々までが描かれてゐる。
- (22) H. St. J. Philby, *Arabian Highlands*, Ithaca, 1952, p. 397ff.
- (23) W. Thesiger, "A Journey through the Tihama, the 'Asir, and the Hijaz Mountains," *Geographical Journal* 110, pp. 188-200.
- (24) 考古館は一九七〇年に考古・博物館局となり、二〇〇八年にはサウジアラビア観光庁に統合され、観光・考古庁 (Saudi Commission for Tourism and Antiquities) が発足した。
- (25) Department of Antiquities and Museums, *An Introduction to Saudi Arabian Antiquities*, Riyadh, 1975, pp. 13. Anonymous, "Preface," *Atlat* 1, 1977, p. 7. 語彙的な意味での「カハナムト」は考古行政の経緯として、A. Al-Ghabban, "L'Arabie Saoudite et son patrimoine," in *Route d'Arabie* (*op. cit.*), pp. 35-43 参照(シム)。
- (26) J. Zarins et al., "The Comprehensive Archaeological Survey Program: The Second Preliminary Report on the Southwestern Province," *Atlat* 5, 1981, pp. 9-42 and Pls. 1-44 at p. 81.
- (27) G. Bailey and A. Alsharekh, *The Southern Red Sea Project: Coastal Prehistory and the Farsan Islands General Report*, Riyadh, 2011, p. 19.
- (28) *Ibid.* pp. 25-26.
- (29) Zarins and Zahrani, *op. cit.*, pp. 70-92 and Pls. 70-79, 89-95.
- (30) *Ibid.*, pp. 92-97 and Pls. 80-99, 96.
- (31) Al-Therayian, "The Red Sea Tihami Coastal Ports."
- (32) この「カハナムト」は「アルヤマン」には相当する。イエメンには古代から重要な港が存在し、それらと内陸の諸都市の間を結ぶ道が「カハナムト」に存在していた(C. Phillips, "A Preliminary Description of the Pottery from al-Hamid and Its Significance in Relation to Other Pre-Islamic Sites on the Tihama," *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 35, 2005, pp. 177-193)。
- (33) Abdul-Rahman Al-Kabawi et al., "Preliminary Report on the Rock Art and Epigraphic Survey of South Western Region (Abha, Jazan) VII Season 1412 AH/1992 AD," *Atlat* 15, 2000, pp. 89-98 and Pls. 27-32.
- (34) C. Phillips et al., "A Latin Inscription from South Arabia," *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 34, 2004, pp. 239-250.
- (35) S. Marion de Procé and C. Phillips, "South Arabian Inscriptions from the Farsan Islands (Saudi Arabia)," *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 40, 2010, pp. 277-282.
- (36) Al-Faqih, *Madnal al-sirayn al-athariyah*, n.p., 1992, pp. 135-191.
- (37) アッサル、ウリヤブの墓域からも同様の墓石が発見されている(Zarins and Zahrani, *op. cit.*, p. 75 and Pl. 93A).

- Al-Thenayian, "The Red Sea Tihāmi Coastal Ports," pp. 291-292).<sup>(42)</sup>
- (43) G. King, *The Historical Mosques of Saudi Arabia*, Essex, 1986, pp. 55-82; id., *The Traditional Architecture of Saudi Arabia*, London and New York, 1998, pp. 51-73 and 116-121.
- (43) T. Prochazka, Jr., "Architectural Terminology of the Saudi Arabian South-West," R. Serjeant and R. Bidwell eds., *Arabian Studies* IV, London, 1978, pp. 113-121.
- (40) G. King, "Some Domestic Buildings of Jabal Bani Mālik in the Tihāma Mountains," *Dirasāt fi al-āthār*, al-Riyād, 1992, 45-46 at p. 45. キンギは「テノンロームのファイトフー山の石積み建築に目地材が使用されるのは、この地域で粘土や非焼成煉瓦が使用されるのと同様、水の節約のため  $\text{فائتو فو}$  (King, *The Traditional Architecture*, p. 119)。<sup>(41)</sup>
- (41) 建材には「ドームやしヤムッドと呼ばれる樹木がよく用いられる。ウッシシャの建材と建築法については新聞記事「(Al-'ushsha) al-manzil al-sha'bi fi jāzān: mukawwanātuhā, anwā'uhā, turq binā'uhā," *al-Riyād* no. 12442, year 38, July 15, 2002 ([http://www.alriyadh.com:8080/Contents/15-07-2002/Mainpage/Thkata\\_847.php](http://www.alriyadh.com:8080/Contents/15-07-2002/Mainpage/Thkata_847.php) 二〇一四年十二月二五日閲覧)に詳し。<sup>(42)</sup>
- (42) G. King, *The Traditional Architecture*, p. 63.
- (43) *Ibid.*, p. 64.
- (44) *Ibid.*, p. 77.
- (45) *Ibid.*
- (46) Zarnis et al., "The Comprehensive Archaeological Survey," pp. 32-33 and Pl. 13 A.
- (47) W. Dostal, *Ethnographic Atlas of 'Asir: Preliminary Report*, Wien, 1983; Id., "The Austrian-Saudi Arabian Collaborative Project in the South-Western Region of the Kingdom of Saudi Arabia: A Preliminary Report," *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 32, 2002, pp. 225-232. W. Dostal et al., *Tribale Gesellschaften der südwestlichen Regionen des Königreiches Saudi-Arabien: Sozioanthropologische Untersuchungen*, Wien, 2006.
- (48) T. Prochazka, Jr., *Saudi Arabian Dialects*, London and New York, 1988.
- (49) イエメンとオマーンにまたがるンドラマウートの一地方で話される現代南アラビア語の一派。<sup>(50)</sup>
- (50) 「ファイトフー・アラビアン」Faif Arabic と呼ばれる。
- (51) J. Watson and M. Al-Azraqi, "Lateral Fricatives and Lateral Emphatics in Southern Saudi Arabia and Mehri," *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 41, 2011, pp. 425-432.
- (52) Saudi Commission of Tourism and Antiquities, *The Cultural Dimension of the Kingdom of Saudi Arabia*, Riyadh, n.d., p. 13.
- (53) 現状では、個人が所有する伝統建築の修復を行う場合、政府より助成金が支給される (*Ibid.*, p. 16)。<sup>(54)</sup>

(54) 例えば、ファイファー山出身者は、若い世代ほど他の都市に移り住んでも同郷者同士では独自の言語を使っていることがファイフィーの研究で明らかになった。彼はこれを同郷者同士の結束を固め、アイデンティティーを守るためと考察している (M. Al-Faif, *The Study of Faif Speakers' Linguistic Accommodation*, M.A. Theses, Southern Illinois University Carbondale, 2014)。また、サウジアラビア政府も若い世代への文化財教育に力を入れている (Saudi Commission of Tourism and Antiquities, *op. cit.*, p. 16)。

